

「梁塵秘抄」卷第二に

根本中堂へ参る途。賀茂川は川広し。観音院の下り松、生らぬ柿の木人やり、禪師坂、滑石水飲四郎坂、雲母谷、大嶽蛇の池、あこやの聖がたてたりし千本の卒塔婆。という歌謡が収められている。

日本古典全書（朝日新聞社編刊）

中の「梁塵秘抄」は小西甚一氏が校註にあたつておられるが、同氏はこの歌謡（整理番号三一二）の「あこやの聖」のあこやについて頭註で

「安居院（アグキ）の誤かも知れないが確かではない」とのべておられる。

しかし私は、この「あこやの聖」は、安居院聖の誤ではなく、埋葬地の上にこしらえた屋形、霊屋にあつて死者の霊を弔う聖を指す、と考えている。「栄華物語」には貴人の葬に当つて鳥辺野の傍に

タマ屋を造つたことが出ているが、このタマ屋のことをあこやと云う。現在でも北九州では霊屋のことを広くあこやという。民俗資料によると、福岡県などではタマ屋は四本竹を柱として藁と細い木とで作られるが、木造の堅牢なものもあつて、内には位牌や卒塔婆がおかれてい

「あこやの聖」について

伊 藤 唯 真

る。これは葬式のとき作つて大体一年位はそのままおぐらしいが、こわれ去るまで建てておいたり、墓石を建立するときになつて取除く場合もある。また最近では墓石の上に更に瓦葺の半永久的なものを作る風さえ生じているという。

あこやとはこのようなもので、中古以

来、貴人の墓地には立派なあこやが造られたようで、死者の埋葬やこの霊屋の造立や管理にあたり、死者の供養をも行う葬記従事の下級僧があこや聖である。彼等は後世の所謂御坊聖に相当する賤僧である。

従つて「あこやの聖」は、安居院聖の誤ではないかとみるより、あこやはそのままあこやとみて、右の如き性格をもつあこや聖と理解した方がよいと思う。「あこやの聖」をこのように考えることによつて、はじめ「あこやの聖がたてたりし千本の卒塔婆」の意味がよくわかるのである。根本中堂へ参詣する途中にあこや聖が死者供養のために立てた千本卒塔婆が一つの景観となつていた地域―墓地―があつたことを窺い知るのである。（助手）